第三講　演習問題(3)

次の甲・乙を読んで、後の問いに答えよ。

甲　〔左は、平安末期の貴族、藤原実家の家集（個人歌集）の一部である。なお、途中に省略した部分、手直しをした箇所がある。
↑注：入試問題そのままです〕

兵衛殿の集を、あながちに「見む」と言へば、「さらば」などはありて、なほ程の経れば、尋ねにやるとて。詞は無くて、

頃は［Ａ］なり。

さくら花　うかぶ水際（みぎは）の　しら波は　たちて日数（ひかず）を　経たるとぞ見る　（和歌Ⅰ）

かへりごと。

さくら花　うかぶ流れは　しろたへに　水に消えせず　よする波かな　（和歌Ⅱ）

かくて、草子は加へられたり。

「B宮内の少輔伊行といひし者、手書くべきありさまを草子に書きて、それをば夜の鶴と名付けて、C女なる者に取らせ置きて身まかりにき」と大宮の加賀が語りしかば、尋ね取りて見て、程の経しを、乞ふとて。これも春のことなり。

加賀

出でて見よ　まれに咲き出づる　花の色の　たち隠れつつ　へだて行くめる

（和歌Ⅲ）

沓冠といふことにて、たはぶれたりけるなめり。

花のころ、俊恵法師がもとより。

春の花　惜しみてはまた　つつみかね　手ごとにさのみ　はては折らめや

（和歌Ⅳ）

かへりごと。

今はただ　咲く花ぞ待つ　寝こそ寝ね　聞くだに惜しみ　手も触れで見む

（和歌Ⅴ）

かく言ひたりしかば、すなはち俊恵法師出で来て、ものなど言ふついでに、「故木工の頭の歌に、『はかなしな　小野の小山田　作りかね　手をだにも君　はては触れずや』（和歌Ⅵ）、かく言ひたりければ、かへしをばせで、故東宮の大夫、使につきて、『いざ、さは、花見に』とありしこそ、昔の広幡の御息所の、薫き物奉られたりけむ心地して、をかしうはべりしとこそ、常にD語りはべりしか。家の集にも書き留めたり」など語るは、Eかへしはすまじきと思ひけるなめり。などてか、必ず同じ様ならむや。

乙　〔左は、甲に言及される広幡の御息所の逸話を述べた、源俊頼著の歌学書『俊頼髄脳』中の一節である。〕

「あはせ薫き物すこし」といへる事を据ゑたる歌。

あふさかも　はては行ききの　関もゐず　たづねてこばこ　きなばかへさじ（和歌Ⅶ）

（「たづねてこばこ　きなばかへさじ」に傍線F）

これは、仁和の帝の、方々に奉らせ給ひたりけるに、みな心も得ず、かへしどもを奉らせ給ひたりけるに、広幡の御息所と申しける人の、御かへしは無くて、薫き物を奉らせたりければ、心あることにぞ思しめしたりけると語り伝へたる。

注　兵衛殿の集…当時、著名な女房歌人であった、上西門院兵衛の個人歌集のこと。
沓冠…各句の頭（冠）と末尾（沓）をたどると、そこに語句や文が隠されている和歌。たどる順序にはいくつか種類がある。
故木工の頭…俊恵の父、源俊頼のこと。
故東宮の大夫…藤原公実のこと。藤原実家の曽祖父にあたる。

問一　空欄 A には、陰暦で示せばどのような時節を表す言葉が入るのが最も適当か。次の中から選べ。

イ　正月中旬　ロ　二月上旬　ハ　三月下旬
ニ　四月中旬　ホ　五月上旬

問二　和歌Ⅰ・Ⅱの句の頭を順にたどると、それぞれ「草子給べ（さうしたべ）」（和歌Ⅰ）、「草子見よ（さうしみよ）」（和歌Ⅱ）のメッセージを読み取ることができる。このような和歌の技法は何と呼ばれるか。次の中から選べ。

イ　挙句　ロ　折句　ハ　発句　ニ　麗句　ホ　連句

問三　傍線部Ｂ「宮内の少輔伊行」は、現存する最古の『源氏物語』注釈書である『源氏釈』を著した人物として知られるが、その女（むすめ）の一人は、高倉天皇の中宮に仕え、平家の公達の一人と恋愛し、後には後鳥羽天皇にも仕えた女房歌人であった。この歌人として著名な伊行の女の名を次の中から選べ。

イ　阿仏尼　　ロ　和泉式部　　ハ　右京大夫
ニ　讃岐典侍　　ホ　六条御息所

問四　傍線部Ｃに見出される助動詞と同じ助動詞を含むものを、次の中から一つ選べ。

イ　あやしうこそもの狂ほしけれ
ロ　男もすなる日記といふもの
ハ　我もしかなみだを添ふる
ニ　たまのひかりも添はざらん
ホ　夢と知りせば覚めざらましを

問五　和歌Ⅲ～Ⅶはすべて沓冠であり、ⅣとⅥには全く同一の文が隠されている。それは、Ⅲ、Ⅴ、Ⅶとは異なって、第一句の句頭→句末→第二句の句頭→句末…とたどっていく形式になっている。Ⅳ・Ⅵに隠されている文を、すべて平仮名で、かつ必要な箇所に正しく濁点を付けて記せ。なお、文末に句点を付ける必要は無い。

問六　傍線部Ｄの動詞の主語は誰か。次の中から選べ。

イ　藤原実家　　ロ　俊恵法師　　ハ　故木工の頭
ニ　故東宮の大夫　　ホ　広幡の御息所

問七　傍線部Ｅ・Ｆの意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から選べ。

Ｅ
イ　花見の返礼をする必要はないと当然私は判断したのである。
ロ　返信すること自体失礼だと故東宮の大夫は思ったらしい。
ハ　薫き物を奉るはずはないと故木工の頭は考えたという。
ニ　和歌を返すべきではないと俊恵は思っていたようだ。

Ｆ
イ　来るのは構わない。しかし、来ても何もあげられないよ。
ロ　やって来るなら来なさい。もし来たらあなたを帰さないよ。
ハ　自分から訪ねてくれることを望む。私の方からは行けないよ。
ニ　問い合わせてくれることは嬉しい。けれども返事はできないよ。

問八 次の中から甲または乙の内容と合致するものを一つ選べ。

イ 兵衛は実家の申し出を受けながら、わざとじらせてその気を引いたのであった。
ロ 伊行が女のために著し残したという書道の本を、実家はぜひ読みたいと思った。
ハ 俊恵の誘いに実家は、残念ながら桜を見に出かけるのは難しい、と返事をした。
ニ 俊恵の父俊頼と実家の曽祖父公実は相談して、子孫のために歌の手本を残した。
ホ 広幡の御息所は、香の調合の方法を知っていたため、帝の愛情を一身に受けた。

第三講　演習問題(3)

〈模範解答〉

問一　ハ　**問二**　ロ　**問三**　ハ　**問四**　ホ　**問五**　はなをたづねてみばや

問六　ハ　**問七**　Ｅ　ニ　Ｆ　ロ　**問八**　ロ

〈現代語訳〉

甲　上西門院兵衛の個人歌集を、ぜひ「見たい」と言うと、「それならば（貸します）」などとは言っていて、そのまま時が経つので、事情を尋ねに（使者を）やるということで（詠んだ歌）。言葉はなくて、三月下旬の頃である。

さくら花…＝桜の花が散り浮かぶ水際に白波が立ったように、（お約束から）日数が経ったと見ることです。

【さうしたべ〔＝草子をお与え〔＝貸して〕ください〕】

返事。

さくら花…＝桜の花が散り浮かぶ川の流れは白く、水に消えずに寄せる波のようだなあ。（お約束も）水に流してはいません。

【さうしみよ〔＝草子を見てください〕】

こうして、草子が添えられていた。

「宮内の少輔伊行といった者が、（上手な）文字を書くための方法を草子に書いて、それを『夜の鶴』と名付けて、娘である者に与えておいて死んでしまった」と大宮の加賀が語ったので、探し出して手に入れて見て、時が経ったところ、（加賀がほしいと）求めるということで（詠んだ歌）。これも春のことである。

加賀

出でて見よ…＝外に出て見なさい。珍しく咲き出した桜の花の色が、隠れていては遠ざかって行くようです。

【いまはたべよるのつる〔＝すぐにお与えください、夜の鶴を〕】

沓冠という歌であって、遊び興じて詠んだようだ。

桜の花の頃、俊恵法師のもとから（歌が送られてきた）。

春の花…＝春の桜の花を愛でてはまたはばかることもできず、どの手もむやみに愛で、ついには折るだろうか。

【はなをたづねてみばや〔＝桜の花を探し求めて見たい〕】

返事。

今はただ…＝今はただ桜の花が咲くのを待って、寝ることもありません。（花が咲いたと）聞くのさえ愛でて、手も触れないで見ましょう。

【いざいきてたづねみむ〔＝さあ行って（花を）探し求めて見ましょう〕】

このように言ってやったので、すぐに俊恵法師が現れて、話などをする折に、（俊恵が）「故木工の頭〔＝父である源俊頼〕の歌に、『はかなしな…＝情けないことです。野の山田を耕すことができないで、手をさえもあなたはとうとう触れないのですか』（とあり、父が）このように言ったところ、返歌をしないで、故東宮の大夫〔＝藤原公実〕が使者に向かって、『さあ、それでは、花見に（行きましょう）』と言ったのは、昔の広幡の御息所が、薫物を差し上げなさったという気持ちがして、趣深くございましたと、（父は）常に語っていました。自分の歌集にも書き留めています」などと語るのは、和歌を返すべきではないと（俊恵は）思っていたようだ。どうして、必ず同じ有り様であろうか、いや、必ずしもそうではない。

乙　「合せ薫物（が）少し（ほしい）」と言っている（頼み）事を、（沓冠として文字を）置いている歌。

あふさかも…＝あの逢坂の関も、夜更けになれば往来の（妨げとなる）関守もいません。やって来るなら来なさい。もし来たらあなたを帰さないよ。

【あはせたきものすこし〔＝合せ薫物（が）少し（ほしい）〕】

この歌は、仁和の天皇が、後宮の方々に差し上げなさっていたものだが、皆意味も分からず、返歌を差し上げなさっていたが、

広幡の御息所と申し上げた人が、ご返歌はなくて、薫物を差し上げましたので、（天皇はこの御息所を）風流の心があることにお思いになっていたと、語り伝えている。